

Ⅲ. 各部門別の生産と販売の概要

1. 湯浅農場

1) 柑橘部門

担当：堀川勇次

(1) 概況

早生ウンシュウミカンの‘宮川早生’と普通ウンシュウミカンの‘林温州’を栽培しており、面積は‘宮川早生’が約237a, ‘林温州’が約35aである。樹齢は25～50年生で、古い樹は改植時期にきている。施肥、薬剤散布とも農用機械で行っているため、農用機械が走行できる通路を確保する必要があり、植栽本数は10a当たり約120本と少ない。

(2) 栽培の概要

病害虫防除、施肥実績は第2表、第3表の通りである。

第2表 ミカンの病害虫防除実績

防除時期	農薬名	希釈倍率	対象病害虫名
1月9日	トモノールS	60倍	カイガラムシ類, ハダニ類
4月9日	ICボルドー66D	40倍	かいよう病
5月12日	ロディー乳剤	2000倍	シャクトリムシ, アブラムシ類
	アブロード水和剤	1000倍	カイガラムシ類
	ストロビードライフフロアブル	2000倍	灰色カビ病
5月27日	エムダイファー水和剤	600倍	黒点病
	アドマイヤーフロアブル	4000倍	アブラムシ類
	アルバリン顆粒水和剤	2000倍	カイガラムシ類, アブラムシ類
6月17日	ジマンダイセン水和剤	400倍	黒点病
	トモノールS	200倍	カイガラムシ類, ハダニ類
	スプラサイド乳剤40	1000倍	カイガラムシ類, ゴマダラカミキリ
7月9日	エムダイファー水和剤	600倍	黒点病
	モスピラン水和剤	3000倍	アザミウマ類, ゴマダラカミムシ
	サンマイト水和剤	3000倍	チャノホコリダニ
7月16日	クレフノン水和剤	100倍	日焼け防止
8月7日	ジマンダイセン水和剤	400倍	黒点病
	ハチハチフロアブル	2000倍	アザミウマ類, サビダニ
	スプラサイド乳剤40	1000倍	カイガラムシ類, ゴマダラカミキリ
9月1日	ジマンダイセン水和剤	400倍	黒点病
	ダニエモンフロアブル	4000倍	ダニ類
	アドマイヤーフロアブル	4000倍	カメムシ類, アザミウマ類
9月26日	スターマイトフロアブル	3000倍	ミカンハダニ, チャノホコリダニ
10月9日	リドミルMZ水和剤	750倍	褐色腐敗病
11月9日	ベフラン液剤	2000倍	貯蔵病害
	ベンレート水和剤	3000倍	貯蔵病害

第3表 ミカンの施肥実績

施肥時期	肥料名・施肥量	N-P-K成分量
春肥4月4日～4月5日	フィッシュプロテイン150kg/10a	N10.5kg-P10.5kg-K7.5kg
元肥10月27日～10月28日	フィッシュプロテイン180kg/10a	N12.6kg-P12.6kg-K9.0kg
合計	330kg/10a	N23.1kg-P23.1kg-K16.5kg

(3) 収穫、販売状況

今年は夏に雨があまり降らなかったことから玉伸びが悪く、小玉傾向になった。品質は糖度12度前後とおいしいコクのあるミカンとなった。収量は約100トンで、学校内や市場、地元の商売人などに販売した。

2)マンゴー部門

担当：藤田卓也

(1)概要

果皮色が紅色である‘アーウィン’種の栽培を20aのハウス栽培している。今年は、冬の気温が平年並みで、マンゴーの開花時期が昨年より1, 2週間ほど早まった。

(2)栽培の概要

時期別作業内容, 施肥実績, 病虫害防除実績は第4表, 第5表, 第6表に示した。

第4表 マンゴーの時期別作業内容

時期	生育相	作業内容
1月上旬	花芽形成	雑草の除草(除草剤使用) 飛び花の花切り
2月	花芽形成	芽かき
3月下旬	出蕾期	春肥の施用 炭そ病・スリップス類の防除
4月上旬	開花期	花穂の吊り上げ, 粘着トラップ設置
中旬	開花初期	花穂の吊り上げ
下旬	開花最盛期	スリップス類の防除
5月下旬	結実期	受粉促進のためのミツバチ放飼(1か月間)
	生理的落果	灰色カビ病防除のための花卉落とし 灰色カビ病・スリップス類の防除
6月	果実肥大期	オーケイ加里の施用 奇形果・キズ果の摘果 果実の吊り上げ
7月上旬	果実肥大期	果実の日焼け防止のための遮光ネットの被覆
8月上旬	収穫初期	摘果と果実の吊り上げ
下旬	収穫最盛期	収穫の開始と出荷
9月上旬		収穫(朝夕方2回, 午前中に出荷)
中旬	収穫終期	
下旬	せん定期	全樹のせん定
10月	秋芽発芽期	礼肥の施用
		元肥の施用, 炭そ病・スリップス類の防除
11月		新芽の調整, 芽かき 苦土石灰の施用

第5表 マンゴーの施肥実績

施肥時期	肥料名・施肥量	N-P-K成分量
3月19日	フィッシュプロテイン 60kg (N-P-K-Mg 7-7-5-2)	4.2kg-4.2kg-3.0kg-1.2kg
	配合ブリケット 60kg (N-P-K 8-5-4)	4.8kg-3.0kg-2.4kg
5月22日	オーケイ加里 40kg (P-K-Mg 3-15-7)	9.6kg-14.4kg-12kg
9月15日	さざなみ 120kg (N-P-K 8-12-10)	9.6kg-14.4kg-12kg
9月25日	バイオ有機 216kg (N-P-K 1.3-1.1-0.36)	2.8kg-2.4kg-0.8kg
11月6日	苦土石灰 80kg	
合計		N-21.4kg P-25.2kg K-24.2kg

第6表 マンゴーの病害虫防除実績

防除時期	農薬名	希釈倍率	対象病害虫名
3月 2日	ジマンダイセン水和剤	800倍	炭そ病
	スピノエース粒水和剤	3300倍	スリップス類
4月 2日	スピノエース	3300倍	スリップス類
4月28日	モスピラン水溶剤	2000倍	スリップス類
	ベルクト水和剤	1000倍	炭そ病
5月13日	モスピラン水溶剤	2000倍	スリップス類
	ストロビードライフフロアブル	2000倍	灰色カビ
6月3日	ダントツ水溶剤	2000倍	スリップス類
	ストロビードライフフロアブル	2000倍	灰色カビ
6月29日	コテツフロアブル	2000倍	スリップス類
	アミスター10フロアブル	1000倍	炭そ病
9月17日	ストロビードライフフロアブル	2000倍	炭そ病
	スピノエース	3000倍	スリップス類
10月10日	ダントツ水溶剤	2000倍	スリップス類
	サンマイト水和剤	1000倍	チャノホコリダニ
	ジマンダイセン水和剤	800倍	炭そ病

(3) 収量, 果実品質, 販売状況

収穫時期は、例年より早かったが、収穫量は前年を大きく上回り過去最高であった(第7表)。

市場に出荷して、大阪や神戸などの百貨店にて販売された。

今年初めて本部と農学部で小箱入りを販売した。注文受付期間が短かったにもかかわらず多数の注文があり、今後の販路として期待される。しかし、通常の収穫・出荷に加え梱包・発送に手間がかかるため効率的なシステム作りが重要になると思われる。



写真 収穫直前の‘アーウィン’果実

第7表 マンゴー(‘アーウィン’)の販売実績
(平成19年~21年)

年度	販売量(kg)
平成19年	2,266.7
平成20年	512.8
平成21年	3,063.1



写真 ‘アーウィン’の着果状況

3) ウメ部門

担当：友廣教道

(1) 概況

面積20aに南高梅31本，小梅15本を栽培している。

(2) 栽培の概要

防除実績は第8表の通りである。肥料は4月にアミノ3号を施用した。

第8表 ウメの病虫害防除実績

防除時期	農薬名	希釈倍率	対象病虫害名
12月25日	石灰硫黄合剤	8倍	縮葉病
3月10日	ICボルドー66D	50倍	かいよう病
4月1, 13日	バリアード顆粒水和剤	4000倍	アブラムシ類
	マイコシールド水和剤	1500倍	かいよう病
4月13日	スコア果粒水和剤	3000倍	黒星病
4月16日	スカシバコン	200本	コスカシバ雄成虫
4月30日	オーソサイド水和剤	3000倍	黒星病，すす斑病
	ダントツ顆粒水和剤	2000倍	アブラムシ類，ケムシ類
9月7日	スミチオン乳剤	1000倍	アメリカシロヒトリ
	アプロード水和剤	1000倍	カイガラムシ類

(3) 収量および販売実績

南高梅の収量は約1t，また小梅の収量は約200kgであった。

販売実績は第9表に示した。生果として地元の市場および個人に販売した。南高梅と小梅は生果販売し，残った果実を梅干しに加工し，農学部祭および大学内で販売した。また，南高梅と小梅を梅干しに加工する段階でできた梅酢もあわせて，農学部祭および大学内で販売した。

第9表 ウメの販売実績

品種名	生果販売量	加工品(梅干)	加工品(梅酢)
南高梅	571.5 kg	140.0 kg	112.1 L
小梅	85.0 kg	46.2 kg	



写真 ウメの収穫時期



写真 近大の梅干し

4) 水稻部門

担当：中東 豊

(1) 概況

本年度も昨年同様、約160 a の水田にキヌヒカリ150 a，イクヒカリ10 a の栽培を行った。イクヒカリは登熟期の高温等に強いとされる品種で、当農場でも栽培を検討するため採種を行った。5月12日に塩水選を行い、5月19日に種蒔きを行った。発芽は天気が良く、高温の日が続いたためか、例年より1日早く6日間でフレームから出した。

育苗も順調に進み、6月8日より田植を始めた。今年は、代かきの時期に雨量が少なく、水路の水が相当に少なく、2週間程度前より入水を始めたため、雑草の発芽が早くなるのが心配された。田植後は、日夜共に高温の日が続く、順調に生育が進んだ。

例年、根絶に苦勞しているクログワイに対して、6月25日に、ハイカット粒剤の散布を行った（第10表）。その結果、7～10日後位で草は全体に茶色に変色し始め、2週間位で緑色が見えなくなるくらい、顕著な効果が現れた。

イクヒカリ苗は田植時には、密度、根の張りがやや弱そうであったが、順調に生育が進んだ。梅雨明け前後は天候の不順な日が続く、土用干しは例年のように乾かないほ場が多く、イネヨトウムシの発生が少しみられた。また、クログワイが再発育したところもあり、例年の代かきであれば、ハイカット粒剤の散布は田植後20～30日位後の方が良いのではと思われる。

お盆以降は良天が続く、ほとんど降雨もなく、9月10日より稲刈りを始めた。

今年は例年になく水田全体が黄金色に仕上がりに、穂がきれいに見え、病害虫もほとんどみられなかった。収穫は昨年に続き豊作であった（第11表）。

イクヒカリの味については、アンケートの結果から、キヌヒカリとあまり変わらないという意見が多く、収穫もほとんどキヌヒカリと同等のため、来年の栽培面積については、さらに検討が必要と思われる。

第10表 水稻の農薬防除実績

種 類	防除時期	農 薬 名	希釈倍率・使用量	対象病虫害名
種籾消毒	5月12日	スポルタック乳剤	2000倍	ばか苗病、ごま葉枯病等
		バイジット乳剤	1000倍	シンガレセンチュウ等
除草 (初期)	6月15日	イッテツ粒剤	1kg/10a	1年生雑草等
		サスケジャンボ小包装 (パック)	10パック/10a	1年生雑草等
除草 (中後期)	6月25日	ハイカット粒剤	1kg/10a	1年生雑草等
	7月7日	ザーベッスMD粒剤	3kg/10a	クログワイ等
病虫害防除	7月2日	パダンミプシン粒剤	3kg/10a	ニカメイチュウ等
	7月23日	パダンSG水溶剤	1500倍	ニカメイチュウ等
	7月23日	バリダシン液剤	1000倍	モンガレ病等
		ブラシンフロアブル	1000倍	いもち病、ごま葉枯病等
	8月21日 ～22日	アプロード水和剤	1500倍	ツマグロヨコバイ幼虫等
	Mrジョーカー乳剤	2000倍	カメムシ類、ウンカ類等	
		ブラシンフロアブル	1000倍	いもち病、ごま葉枯病等

第11表 過去3年間の玄米販売量および販売金額

年 度	収穫袋数 (30kg入袋)	販売金額 (円)
平成19年度	234袋	1,690,500
平成20年度	260袋	2,034,000
平成21年度	257袋	2,010,200

2. 生石農場

1) 黒毛和牛部門

担当 浦西章生

今回の出荷牛は平成19年9月より、素牛（飛騨牛）の肥育を始め、約18～20か月間で仕上げた。平成21年5月7日に、学内販売用として2頭、また5月27日に大阪南港市場（大阪市食肉市場）に2頭出荷した（第12表）。現在、格付けの高位安定を目標に、平成20年9月に導入した黒毛和牛4頭（平成22年1月現在、生後23～24か月齢）と平成21年9月に導入した黒毛和牛4頭（平成22年1月現在、生後11～12か月齢）を肥育している。さらに、大学本部で平成21年5月26日、6月5日に、生物理工学部で6月2日に学内販売を行い、準備した牛肉を完売することができた。学内販売については、今後も続ける予定である。また、大阪市内のステーキ専門店に当農場の牛肉を提供し、試食会を実施したところ、肉質の柔軟性と脂肪の甘みについて高い評価を頂き、好評であった（平成21年5月27日、ステーキハウスオクソンにて）。今後このような試食会を積極的に行い、当農場産牛肉をアピールしていきたい。

第12表 黒毛和牛の出荷販売状況

出荷期日	出荷場所	頭数 (頭)	体重 (kg)	枝肉重量 (kg)	格付け	販売価格* (円)
5月7日	学内販売用	2頭	707.0	461.2	A 4	1,398,900** (2頭分合計)
			643.0	415.1	A 4	
5月27日	大阪南港市場	2頭	710	457.6	A 4	57,365
			725	470.0	A 5	

* 販売価格とは、大阪市場食肉市場でセリ落とされた価格を示す
 ** 学内販売のため大阪市場での価格より安価になっている
 (相場では2頭で約180万円に相当)



*今回、格付け A5 に評価されたロース肉 (写真右は本牛)

3) 合鴨部門

担当 岩森明彦

合鴨の生産と販売状況は第13表の通りである。

合鴨の販売は「あらぎの里(和歌山県有田川町三田)」と「農林産物振興センター(和歌山県有田川町清水)」を中心に行った。また、解体業者変更に伴い、平成21年5月の出荷より値段の見直しを実施した（ロース肉 100g当たり400円を500円に、モモ肉100g 当たり300円を400円に値上げした）。

11月の出荷よりパッケージのリニューアルと鴨肉名称を「おいし鴨」へと変更し、販売促進に繋がるイメージアップに努めた。



写真 合鴨の飼育状況

第13表 合鴨の生産と販売状況

出荷日	入荷場所	入荷羽数	飼育日数	出荷日	出荷羽数
3月26日	高橋人工孵化場	37羽	64日	5月28日	33羽
9月3日	高橋人工孵化場	42羽	70日	11月11日	39羽

売上げ金額合計 (平成21年4月～11月) : 108,706円

2) ミニブタ部門

担当 岩森明彦

本年度は、ミニブタの分娩を2回行った(第14表)。自然分娩と誘起分娩(ホルモン注射)の2種類で行い、妊娠日齢は平均15日であった。

本年は、研究の都合により分娩回数を減らしたが、1頭当たりの産子数が10匹の個体があった。

今後、この個体の遺伝的背景を調べ、生産性の向上に繋がる繁殖飼育法を構築したい。



写真 ミニブタ3～4か月齢(♀)

第14表 ミニブタの生産状況

出産日	出産数	離乳日
10月22日 ♂ 2	(♂ 2 死亡)	11月25日
10月29日 ♂ 3 ♀ 7	(♀ 1 死産, ♀ 3 死亡)	

*10/22:自然分娩
10/29:誘起分娩